

## 一学期を終えて

短い一学期が終わりました。子どもたちは日常の不自由にも耐えて、一所懸命授業を受けてくれました。おかげで、授業の遅れていた分は、八月の終わりに授業を行うので、それも含めると、完全に取り戻すことができるとなっています。テストを見ても、ほぼ学習内容は理解できています。短期間にしつかり学んでくれた子どもたちの努力には、心から感謝しております。

さて、六月から全員の登校が始まりましたが、五月中は、学級のほぼ半数が登校する、分散登校の期間がありました。その時、思ったことは、一人一人の子どものことをしっかりと見ることができるということです。裏返せば、三十人以上の学級は、教師の能力の許容をこえていると言えます。これは、私だけが感じるのではなく、日本の多くの教師が感じたこと、気づかされたことであり、報道でも取り上げられていました。未だ四十学級を続ける日本の教育の欠点に、気づかなかった私たちの感覚の鈍さであるとも言えます。

今は、三年以上の学年では、四十人学級(四十一人にならない)と2クラスにはできない)

と定められています。これは、支援学級の子どもを含めない人数なので、多い時では、四十数人の学級になることもあります。実際、下田小でも、数年前に、五年生で四学級であったのが、六年生に三学級になった時もありました。全く酷い話です。

せめて、三十五人学級、三十人学級に！これは、私が教師になったころから、現場の教師がずっと訴え続けてきたことです。

コロナで学力低下が心配であるならば、それこそ少人数の学級編成を進めることです。少人数であるならば、ソーシャルディスタンスも十分取れます。一学級のあたりの人数を減らして、教師を増やすに限ります。

連載—三六年間の教育を振り返る⑨—

### 続き「総合的な学習の時間」が始まった

「総合的な学習の時間」が注目されるようになる背景には、個性化教育の流れがありました。子どもの興味や関心によって課題を解決させることが個性の重視につながるのと考えられました。「教師は教えてはならない」「子どもからの発想以外のものを押しつけるべきではない」ことが優先され、子ども任せの授業が増えました。「指導」ではなく「支援」という言葉が使われ始めたのもこの時期でした。「基礎基本が身につけていない子どもに果たして選択は可能なのか？」「興味のあるものだけをさせて、興味がなかったらやらなくていいの

か？」という疑問の声も新しい学習指導要領が始まる前からありました。

「総合的な学習の時間」のモデルとして文科省は次のような項目を挙げていました。

- ①国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題
- ②生徒の興味・関心に基づく課題
- ③地域や学校の特徴に応じた課題

当時は、①の4本柱(国際理解、情報、環境、福祉・健康)を行う学校が多く、国際理解Ⅱ英語と捉え、英語を積極的に進める自治体もありました。当時の「国際理解」は、今よりも広い捉え方で、例えば、在日の子どもの多い地域ではハンブルを教えたり、中南米の子どもの多い学校では、スペイン語と、異文化を体験させたりする内容が多かったようです。しかし、「特色ある学校づくり」として、多くの自治体が「英語」を目玉にし、英語を行っていると既成事実を作ってしまった。そのため、国際理解↓外国語↓英語という図式の元、英語が導入されるようになっていったのです。現在でも教科名は「外国語」ですが、実質「英語」です。週三時間あった「総合的な学習の時間」が二時間になり、その一時間が「外国語Ⅱ英語」の時間として使われるようになりました。

このように「英語」は約二十年かけて、教科になりました。「英語」導入のための長期的な戦略があったのかどうかは分かりませんが、「総合的な学習の時間」ができた当時の考え

と、今とでは随分違っていると感じるので  
—子どもの日記から—

## 姉妹の関係 第八回—翼君の日記から

□「くだらんけんか」 五年 理恵

夜、夕ご飯を食べ終わった時、お母さんが、「ワイン飲み終わったから、ビン、理恵いるか。」と聞いたので、「いる—」

と言いました。そのビンは、魚の形がきれいにうつついたので、前からほしかったのです。でも、お姉ちゃんが、

「あかん。これ有香のやで。」

と言いました。私は、言い返そうとしましたが、口では負けるので、やめました。それで、「わかったわー、あげるわ。」

と言っていました。

その後、私が、

「この前も、理恵のラムネのビンもとったし、何でビンがほしいのっ。」

と聞くと、

「集めてるの。」

と言ったので、

「ビンなんか集めて何すんの?」

と聞きました。すると、

「部屋にかぎるの。」

と言われたので、

「理恵だってかぎりたいわ。」

と言いました。

「あんた、すぐよこすやろ。お姉ちゃんは、集め

てんの。」

と言いました。私は、

「それやったら、ラムネのビン返してね。」

と言ったら、

「いいで。」

と言ったのに、後から、

「ダメ。」

と言われましたが、やっぱりほしいので、お姉ちゃんにたのみました。すると、

「うですもう、勝ったらあげる。」

と言つので、勝負しました。

私が、

「レディーゴー。」

と言ったしゅん間、たおされました。負けたので魚のビンはあきらめました。

最後に、じっくり見せてもらいました。時間を

見ると、九時を過ぎていました。

(何だかくだらんことでケンカしたな)

と感じました。

1997.9.18

今回から理恵さんの日記です。理恵さんは二人姉妹の妹です。二歳上の姉にいつも意地悪をされています。妹なので、お姉ちゃんのわがままをきかないといけない弱い立場なのですが、受け入れなくてはならないのか未来予想ができる。だから、わがままも受け入れて聞いてあげるといふ、一方では大人びた目線でお姉ちゃんを見ています。腹立つところもあるけど、お姉ちゃんのことを書いてくるのは、やっぱりお姉ちゃんを慕っているのでしょう。

(続き)

## 記述が変わった教科書

### ⑦元寇

かつては、「元寇」「蒙古襲来」と書かれていたものが、今の教科書では「元の大軍がせめてくる(元寇)」と括弧付きで表記されています。「元寇」ではなく、「モンゴルの襲来」「蒙古襲来」が一般的な表記の仕方のようです。

鎌倉時代、1274年(文永11年)と1281年(弘安4年)の二度に渡って、九州北部がモンゴル帝国に二度襲撃されます。「文永の役」「弘安の役」この二回の襲撃を合わせて「元寇」と呼ばれていました。「元寇」の「寇」とは外からの侵入を表す言葉です。

二度の役では、暴風雨(神風)によってモンゴル軍が大損害を受け、撤退したと教わってきました。これが後の「神風信仰」を生んでいくこととなります。

しかし、最新の研究では、一度目の「文永の役」では、暴風雨によって撤退したことは分かっています。一方、二度目の「弘安の役」について、モンゴル軍が撤退した理由について分かっていないとするのが定説のようです。



蒙古襲来絵詞